# 少女と幽霊

澤村多門

# 序章

　大ちゃんは、オジサンだ。年の割に老けて見えることを自覚しているのか、本人は「初老の紳士と呼べ」なんて言うけれど、そこまで年をとっていないと思う。でも、「中年のおっさん」とも言えない。私にとって中年のおっさんというと、お腹が出ていて、髪が薄くなっていて、オヤジ臭がして、肌が脂っぽいイメージ。大ちゃんは、やせているし、白髪は多いけど髪もあるし、いい匂いだし、肌もかさかさしている。
「だからね、大ちゃんは私の中ではオジサンに分類されます」
　得意げに私が言うと、「枯れているっていうんじゃない？肌がカサカサって」と少しがっかりしたように大ちゃんは言った。せっかく、他にもいろいろ褒めたのに、肌のことしか聞いていない。
　大ちゃんは、いつもするみたいに、私の両頬を両手で包んだ。カサカサした、あたたかい手。本に触る仕事をしているので、脂分は紙に吸い取られる。心から本を愛し、本を汚さないように、一日に何度も何度も手洗いをする。私は、そんな大ちゃんの「頑張っている手」が好きだった。
「キスしてもいい？」と聞かれて、「どうぞ」と答える。いつもキスをする時に、こうやって確認するところも大好きだ。私が嫌がることは絶対にしない、優しい大人の男の人。
　大ちゃんは、私のおでこにキスをして、それから、唇にキスをした。
　やっぱり、カサカサの唇だ。ちくちくとしたひげが、鼻の下をくすぐる。
　それがおかしくて、笑いそうになった時に、濡れた感触が私の口の中を探った。
「んー、んー！！」
　苦しくなって、ギブアップのつもりで、大ちゃんの背中をげんこでごつごつ叩くと、大ちゃんは私から離れて、にやりと笑った。
　大ちゃんは時々こうやって、私が子供であることを知らしめる。
「さて、そろそろ門限だな。送るよ」
　私は、門限がある学生の身なのだ。
　私、遠藤さち、高校三年生。
　オジサン、木崎大輔、四十三歳。
　母親公認の仲です。

# 海

　大ちゃんに海は似合わない。東京生まれ、東京育ち。都会っ子。だから、デートは街をぶらぶらしたり、映画を見たり、ドライブしたり、図書館に行ったり。
　どちらかといえばインドア派の大ちゃんが、「日帰りで海水浴に行こう」と言いだした。
「ドライブじゃなくて？」
「泳ぐぞ」
「温泉じゃなくて？」
「年寄り扱いするな」
　偏見だと思う。お年寄りじゃなくたって、温泉は好きだ。スパなんて言葉もあるくらいなのに。
「何でまた？」
「泳ぎたくなった。海の家のラーメンも無性に食べたい」
　どうやら、食欲はすべてに勝るらしい。
　強引な大ちゃんに押し切られ、夏休みに日帰りで隣県の海水浴場に行くことになった。

　海の家の更衣室で、水着に着替えた私を見て、大ちゃんは一言、「よろしい」と言った。よく言えば落ち着いた雰囲気の（悪く言えば、オジサンの）大ちゃんに合わせて、ビキニタイプではなく、落ち着いたセパレートデザインの物にした。
　一方の大ちゃんは、派手とも地味とも言えない、微妙なデザインの海パンだった。やせているけれど、お腹のまわりが少したるんでいた。大ちゃんの裸を初めて見た。とても「よろしい」とは、言えなかった。
　子供連れの家族。お父さんが子供に泳ぎを教えている。カップルは水を掛け合っている。ナンパをしている男。待っている女。私たちは付き合っているのに、どれにも属していない。明らかに浮いている。
　大ちゃんは、私の手も引っ張ってくれない。一人で海に入って行って、泳ぎだす。私も負けじと泳ぐ。誰に意地を張っているのかわからない。大ちゃんに甘えたい。でもできない。
　二人で黙々と泳ぐ。一体何をしに来たんだろう。海水浴、そのもの。イチャイチャはなし。
　不意に大ちゃんが波間に消えた。顔をあげて泳いでいたのに。心配になる。足がつった？おぼれた？心臓発作？年だし！！
「ちょっと、大ちゃん」
　ざぶん。
　目の前から、ぬっと現れた大ちゃんは白い歯を見せて笑った。それから、髪をかきあげる。わき毛がキラキラしている。男の人のわき毛を、もとい、裸をこんな間近で見るなんて。ドキドキする。大ちゃんのしぐさは、妙に色っぽい。
「うん。塩辛い」
　自分の唇をぺろりと舐めて大ちゃんは言った。
「大ちゃん、キスして」

「こんな公衆の面前でしません」
　そう言って、私の手をとると、「ラーメン、食べに行こ」と、ざぶざぶと歩きだした。マイペースだな、と思って、それに続いた。
　しょうゆ味のラーメン。ちぢれ麺。なると、チャーシュー、メンマ、ほうれんそう、ねぎ。
「おいしいね」
「そうだろ」
　あぐらをかいている大ちゃん。
　ポロシャツにハーフパンツの大ちゃんは、なんだか新鮮だ。
　ラーメンを食べて、サザエのツボ焼きを食べて、海の家を出た。シャワーを浴びたのに、全身がベタベタ。塩っぽい感じ。髪の毛だけがバサバサしている。
　ギアに置かれた、大ちゃんの手に触ると、少しだけしっとりしていた。
「どうした？」
「何でもない」
　車は快調にエンジンの音をさせている。海の見える風景がなくなり、峠道になり、どこからどう見てもラブホテルのお城が見える。
「寄って行こうか」と大ちゃん。
「いいよ」と私。
　高校一年の時に付き合い始めたから、もう三年目なのに、私たちはきれいな交際のままだった。
「冗談だよ」
「いいよ、寄ろうよ。大ちゃん」
　むきになる私は子供だと思う。
「寄りません」
　ホテルの横を、スーッと車は通り過ぎる。
「どうして、そういうことしないの？私が子供だから？」
　むくれて私は言った。
「時計見てみろー。門限ギリギリだぞー」
　ラジオの音量が少し大きくなる。少しずつ街に近付いている。遠くに灯りが見える。にぎやかな場所に近付いているのに、寂しい。
　ラジオから流れる洋楽を大ちゃんは鼻歌で歌う。寂しいのは私だけで、大ちゃんは何も気にしていないというように、調子よく車を走らせる。それも何だか気に入らない。
　無言のまま家の前について、「おやすみ」と言って、車を降りた。いつもなら、車の中で私に手を振ってくれる大ちゃんは、全然別の方を見ている。その視線の先には、お母さんがいた。
　お母さんは私を見つけると、満面の笑顔で大きく手を振った。大ちゃんが車から降りる。
「海に行ったんだって？」
　お母さんは、大ちゃんに話しかけた。それから、「ふーん」と大ちゃんの顔と私の顔を見比べた。

「何だよ」と不機嫌な大ちゃん。
「大輔が、どんな顔で、さちとデートしてるのかなと思って」
　お母さんは、大ちゃんのことを「大輔」と呼ぶ。それも二人の間に何か関係があるみたいで、気にくわない。
「門限には、間にあったからな」と大ちゃん。
「はいはい」と笑うお母さん。
「さっちゃん、おやすみ」
　大ちゃんはそう言って車に乗り込んだ。
　私とお母さんで、車のテールランプが見えなくなるまで、見送った。
　家に入って、お風呂に直行した。バスタブにお湯をためている間に、水着の洗濯をする。
　別れ際に不機嫌そうだった大ちゃんのことを忘れるように、ママの「大輔」って声を忘れるように、帰り道の恥ずかしい子供っぽさを忘れるように。ぎゅっぎゅっと押し洗い。潮の香りが、お風呂に広がる。
　大ちゃんは、私のことを子供だと思っていて、困っているのかもしれない。門限があるような子供だから、手を出したくないのかもしれない。色っぽくないから、その気になれないのかもしれない。
　それとも、実は、お母さんの気を引きたいだけなのかもしれない。本当は私じゃなくて、お母さんが好きなのかもしれない。
　嫉妬って醜い。お母さんのことも、大ちゃんのことも嫌いになりそうだ。
　お湯は、まだたまっていないけれど、バスタブにつかった。日に焼けた所がヒリヒリ痛い。
　水着を着た時に、「よろしい」と言ってくれた大ちゃん。あの時、少しでもやましい気分になってくれたのかな。
　お風呂から上がると、クーラーで適温になった部屋で、お母さんがビールを飲んでいた。
「どうだった？海。楽しかった？」
「広かった。人が多かった」
　麦茶をコップに入れて、お母さんの隣に座る。
「どうしたの？ふくれっ面で」
「大ちゃんは、お母さんのことが好きなんだよ。私じゃなくて」
「はぁ？それは絶対にないと思うけど」
「どうして言いきれるの？」
「だって、子供の頃めちゃくちゃいじめたし。あれで、私のこと好きだったら相当のマゾだよ？」
「マゾかもしれない」
　お母さんは、「うふふ」と笑った。
「女の子は笑顔の方がいいよ。大輔にお礼言った？」
　言ってない。忘れてた。
　ふらふらと、立ちあがったお母さんは、電話をとってくると短縮ボタンを押した。ツ―コールで相手が出る。

「もしもし。大輔？アンタ、マゾだったの？」
　それだけ言って、お母さんは私に電話の子機を渡してくれた。
「大ちゃん？」
“麻美は、さっちゃんに何を吹きこんでる？僕は、いたってノーマルだ”
　大ちゃんは、お母さんのことを「麻美」と呼ぶ。それも気にくわない。
　大ちゃんにお母さんのことを好きなのか聞きたかったけど、それもできない。
　やっぱり嫉妬は醜い。話題を変えよう。
「もう、お風呂に入った？」
“入った。ヒリヒリ痛いな。そんなに焼いたつもりないのに。さっちゃんも？”
「うん。ヒリヒリした。今日、ありがとう。海水浴、久しぶりで楽しかった」
“また、行こうな”
「うん。それと、ごめんね」
“何が？”
「不機嫌だった。何か、悪いことしちゃったのかと思って」
“え？そんなつもりなかったけど”
「うそばっかり。お母さんと話しているとき、不機嫌だったよ」
“それは…麻美に、冷やかすように見られたから”
「それだけ？」
“それだけ”
「今度、お城に連れて行ってくれる？」
“行かない”
　受話器の向こうで、大ちゃんが“はぁー”とため息をついた。
「わかった、もういい。大ちゃんは、私のことあんまり好きじゃないんだよね」
“どうして、そうなるの”
「大ちゃんが好きなのは、私じゃなくてお母さんでしょ。お母さんの方がグラマーで、大人だし」
　受話器の向こうから、“はぁ？？“という大声が聞こえてきた。お母さんが、私から子機をとる。
「何をもめているんだか知らないけど、電話じゃなくて、顔を合わせて話したら？相当、さちに誤解されてるよ」
　受話器がことりと定位置に戻った。
「大輔、来るって。ちゃんと腹を割って話しなさいよ」
　腹を割ってくれないのは大ちゃんだよ。いつも大人のお面付けて。
　大ちゃんは、いつもの服装でやって来た。シャツに、グレーのズボンを合わせている。髪は半がわきで、コンタクトじゃなく眼鏡着用。
　お母さんには、隣の部屋に行ってもらった。聞き耳を立てているかもしれないけど。
「麻美のことを好きだなんて、すごい誤解だ。僕としても腹立たしい」
　隣の部屋から、「なによう。こっちだって願い下げですぅ」という酔っ払いの声が聞こえた。
「さっちゃんと一緒にいたいから、できるだけ会っているつもりなんだが、僕の何が傷つけたの

かな。怒らせちゃったのかな」
「怒ってないよ。悲しいだけ」
「うん。だから、何がいけなかった？直せるところは直すよ」
「…大ちゃんは、何もしないじゃない。それが嫌なの。私の体に興味ないみたいな、教会の神父さんみたいな所」
　ガラッとドアが開いた。
「えー？意外。あ、もしかして年齢も年齢だし、涸れちゃった？早いわねぇ、老化が。でも、あるわよね、そういうことも。さち、こればかりは仕方ないのよー。触れないでやって」
　大ちゃんがプルプル震えていた。
「あのな！節度ある付き合いをしないとぶっ殺すって、麻美が言ったんだぞ。僕は、律儀に…」
　お母さんが、うふふと笑った。
「海水浴って、水着姿が見たかったのよねぇ。若い娘の水着を見たいなんて、エロオヤジなんだから」
　ビールをとりに行くお母さん。機嫌の悪そうな大ちゃん。
「そうなの？」
　答えてくれない。
「はい！仲直り。飲もう、飲もう。大輔、ビール！はい、さちはジュース」
「僕は車だし、お酒はちょっと…」
「は？飲めないっていうの？」
　たじたじとした大ちゃんは、目のすわったお母さんから缶ビールを受け取っていた（アルコールハラスメントだと思う）。弱い。弱すぎる。私の知らない大ちゃん。
　私の知っている大ちゃんは、大人で、余裕があって、好きとか絶対に言ってくれない。私の水着を見ても、顔色一つ変えず、「よろしい」って言っただけの人。
「大体さ、さちと付き合ったとたん、うちに上がらないってどうなの。ちょっと、あからさますぎない？いかにも、さち目当てって感じ」
「用があるのは、さっちゃんだけだ。麻美はどうでもいいんだ」
　大ちゃんから初めて聞いた。私を選んでくれている言葉。うれしい。初めて、好きって聞いた気がする。
「大輔、さちを大切にしてくれてありがと」
「おお」
「傷つけたら、小さい頃からの不始末を全部ばらすからね」
　それはもはや、脅迫では。
「さちは、こんな棺桶に片足突っ込んだ男の、どこがいいのかね」
「棺桶って言うな！」
　大ちゃんは、汗をかいたビールをごくごく飲んだ。のど仏がゆれる。大ちゃんの、のど仏、好きだな。男の人って感じで。
　顔が赤くなってる。実は、お酒、弱いのかな。

夜は更けて、大ちゃんは酔い潰れて、お母さんは「弱いわね」と言って、部屋に行ってしまった。大ちゃんにタオルケットをかけて、クーラーにタイマーをセットして、私も自分の部屋で休んだ。
海で疲れたせいか、昼までぐっすり眠った。リビングに行くと、大ちゃんはまだ寝ていて、テーブルの上には「仕事行ってきます」とお母さんの書きおきがあった。
大ちゃんの寝顔を初めて見た。ひげが少し伸びてる。口をちょっとあけてる。
「大ちゃん」
顔を近づけて呼ぶと、重たそうにまぶたを開けた。片方のまぶたが、二重から三重になってる。
寝ぼけたままの大ちゃんは、私の手首をつかむと、そのまま引き倒した。ばふっと、つんのめるように、大ちゃんの上に崩れる。「ぐげ」っとカエルの潰れたような声。慌てて離れると、涙目になっている。
「ご、ごめん。大丈夫？」
「さっちゃんの膝が、もろにタマに…」
「うう…」というううめき声。私にできることは、何もない。
外では雨の音がしていて、ああ、昨日海水浴でよかったなと思った。大ちゃんが苦しんでいるのに、のんきなものだ（でも、触るわけにもいかないし…）。
「さっちゃん、おいで」
冷静さを取り戻した大ちゃんの声で振り向く。さっきと同じように、手を伸ばしている。おそるおそる私も手を伸ばすと、ゆっくりと引かれる。今度は大丈夫。着地点は間違えない。
大ちゃんにぎゅっと抱きしめられて、こういうのは初めてだなと思った。キスはしたことあるけど、ここまで密着して、ギュッて抱きしめられたことはない。首筋に、少し汗をかいている。顔に当たるひげが、ちくちく、じょりっとする。
「大ちゃん、暑い？汗かいてる」
抱きしめられていた腕が解かれる。
「オヤジ臭い？ごめん」
「そんなこと気にしてたの？臭くないよ」
私は、汗に触れた。
「カサカサなのに、うるおってる」
「脂のない老人のように言わないでもらいたいね」
「ひげ、じょりじょりする」
「伸びるんだよ」
こうしているのが恥ずかしくて、どうでもいいことばかりしゃべってしまう。
「大ちゃん、キスしてもいい？」と、私。
「どうぞ」と、目をつぶる大ちゃん。
大ちゃんがするみたいに、おでこにキスをして、唇にキスをする。それから、首筋の汗を舐める。シャツのボタンをはずす。
「麻美は？」

　きょろきょろ周りを気にする大ちゃん。
「仕事」
　シャツのボタンを半分まで外したところで、
「さすがにここじゃ無理だ。また、今度」と、大ちゃんは言った。私の手は震えていた。それを隠すように、もう一度抱きしめてくれた。
　私、高校三年生。
　大ちゃん、四十三歳。
　夏の出来事。

# 図書館

　大ちゃんは、市の図書館で働いている。今月の新刊のポスターを作ったり、図書館誌を作ったり、おススメ本のコーナーを考えるのが主な仕事。
　休館日以外は毎日、学校帰りに図書館に寄る。大ちゃんがカウンターにいる時は、小さく手を振って、遠くから大ちゃんが見える席に座る。カウンターにいない時は、学習室に行って勉強する。時々大ちゃんが、空調の調節に来てくれる。
　大ちゃんは、老若男女の人気者だ。本の検索や、予約はもちろん、本の位置を案内したり、よく来る人には、本の紹介もしている。
　詩の好きな人には、新しく入った詩集。
　料理の好きな人には、料理本の新刊。
　新書や、ベストセラーだけでなく、大ちゃんの本の知識は広い。
　大ちゃんと私が付き合うようになったのは、もともとお母さんと大ちゃんが知り合いっていうこともあるけれど、本がきっかけでもある。
　私のパパ（小さい頃に、お母さんと離婚したので、私の中でパパは永遠にお父さんにならない）は小説家で、年に一冊新刊を出す。そればかり読んでいたら、大ちゃんが声をかけてくれたのだ。
「荻野庸さんの作品が好きなの？」って。
　パパの作品は、最近の恋愛小説しか読んだことがなかったんだけれど、大ちゃんが教えてくれたのは、本格的な推理小説だった。それがすごく面白くて、大ちゃんと会話が弾んだ。
「荻野さんの初期作品五冊は、ミステリーなんだけど、読んでみたらどう？」
　私はパパの書いた本を、一冊一冊、出版年順に読んだ。読み終わると、大ちゃんに感想を報告した。大ちゃんは、子供の私の話を嬉しそうに聞いてくれて、自分の感想も言ってくれた。
　荻野庸の作品は、ミステリー五作が終わると、いきなり恋愛小説期に突入した。荻野庸初という、恋愛小説を読んで、私はすごく感動した。一晩中、本を読んで、泣いたのは、初めての体験だった。
　図書館の休館日をはさんで、大ちゃんに本の感想を言った。私はすごく興奮していた。大ちゃんは笑って、うれしそうに聞いてくれた。
　そして、「好きな作家さんができるって、幸せなことだ」って、言ってくれた。
「荻野庸、ミステリーもノンストップでよかったけど、私はこっちの恋愛小説の方が好き。こういう素敵な恋愛したいなって思う」
　その時、大ちゃんは真面目な顔をして言った。
「さっちゃん、僕と付き合ってくれないか」
　真面目な顔をしていたから、冗談ではないと思った。それから、ちょっとそこまで付き合っての「付き合う」という意味とは違うと思った。
「大ちゃんも荻野庸が好き？」
「好きだよ」
「それなら、付き合う」

　大ちゃんが、パパの作品を好きなことがうれしかった。大ちゃんは優しくて、親切だったし、大人の男の人で、私が嫌がることは絶対にしないと思った。付き合うきっかけは、その程度だった。
　けれど、今では絶対私の方が大ちゃんのことを好きだと思う。私の頭の中は、人に見られたら恥ずかしいくらい、大ちゃんのことでいっぱいだ。
　返却された本をカートにのせて、手際良く棚に戻す大ちゃんの後をついていく。
「木崎さん」
　本のことを聞く時は、みんながするように、私も名字で呼ぶ。
「はい、何でしょう」
「木崎さんのお勧めは何ですか？」
　大ちゃんは少し考えて、
「これなんかどうかな」と、大きな写真集を持って来てくれた。
「本当は、夏に入ればよかったんだけど、秋になってしまった。海の写真。きれいだから、あとで一緒に見よう」
　大ちゃんは、結構ロマンチストだと思う。夏に海水浴に行ってから、海に魅せられている。この前勧めてくれたのは、海底火山の本で、その前は海に関係した恋愛小説だった。
「あとでって、仕事中に本見てていいの？」
「五時で上がるから、僕の家で見ない？」
　大ちゃんの家に行くのは初めてだ。
「うん。行く」
　大ちゃんは「じゃ、あとで」と言って、カートの方に戻って行った。

　仕事が終わった大ちゃんと、車にのって帰路につく。
「夕飯、コンビニでいい？」
「私、作るよ」
「それはまた今度」
　大ちゃんと付き合っていると、なぜか「また今度」が多い。
　コンビニの駐車場に、きれいに乗用車がバックで入った。お弁当コーナーで、私はスパゲッティカルボナーラをかごに入れる。大ちゃんは、ハンバーグ弁当。それから飲み物とお菓子もかごに入れる。
「ちょっとまだ見たい物があるから、さっちゃんは、雑誌でも立読みしてて」
　そう言った割に、早々にレジで会計をして、私は、ほとんど漫画も読めないまま、「お待たせ。行こうか」と呼ばれた。
　助手席に乗った私に、お弁当のレジ袋を渡す。すごくいい匂い。
「あ、何か買ったの？」
　紙袋に入ったものを見つけると、興味なさそうに、「整髪料」と大ちゃんは言った。
「男の人ってどんなの使うの？」

　そう言いながら紙袋を開ける。
　入っていたのは、明らかに整髪料ではない。
「…と言いつつ、コンドームなんだけどな」
　あっさりと白状された。
　スピーカーからはジャズ。
「今日しようってわけじゃないよ」と、弁解する大ちゃん。
「じゃ、いつするの」と、詰め寄る私。
「また、今度」
「そればっかだね」
「女の子を家に呼ぶ時の、万一の備えだよ。いきなり、そういうことしたくなったら困るだろう」
「ふうん。いきなりしたくなるものなんだ。で、しちゃうんだ、大ちゃんの場合。私には、また今度っていう余裕があるくせに、他の人とは、しちゃったんだ」
　何だか意地悪な気持ちになって、意地悪な返事をしてしまう。私は、「また今度」って言う大ちゃんが嫌なのに、大ちゃんは私が別のことで怒っていると勘違いしている。
「悪かったよ。今、買うべきものじゃなかった。そんなにガツガツしているつもりはないんだ。ごめん。機嫌直して」
　的外れなことを言っているので、つい笑ってしまった。
　大ちゃん、私、大ちゃんがガツガツしてくれるの、うれしいんだよ。いつも冷静な大ちゃんが、あたふたするくらい、そういうの考えてくれたのうれしいんだよ。でも、「また今度」はひどいんじゃない？
「大ちゃんは私が嫌がることはしないし、大好きだけど、一つだけ直して欲しいことがある。言ってもいい？」
「どうぞ」
「また今度、って言うの、もうやめて。大ちゃんならいいから」
　大ちゃんは私を見た。
「よそ見しないで。前見て運転して」
「はいはい」
　つまりは。
　頭の中でもう一度整理をする。
　今日これから、ご飯食べたり、お風呂に入ったり、本を見たり、どれがどういう順番になって、どれが省かれるかわからないけれど、大ちゃんとついに結ばれる。
　私が宣言したことは、つまりそういうことだった。
　私、高校三年生。
　大ちゃん、四十三歳。秋の夕暮れ。

## 大ちゃんの家

　大ちゃんの家は、「家」と聞いていたので、一軒家を想像していたが、マンションだった。
「せまいけど、どうぞ」
　そう言われて上がった玄関は、ほんのりとミントの香りがした。
「大ちゃんち、探検してもいい？」
　さっき紙袋を勝手に開けて、気まずい思いをしたので、確認をした。
「探検ってほどの広さじゃないけど、いいよ」
　入って左側がリビング。テレビにこだわりがないらしく、いまだにブラウン管のテレビだった。大ちゃんは買ってきた物をテーブルの上に置いた。
　リビングの奥にキッチン。シンクはピカピカに磨きあげられている。どうやら料理はしない主義みたい。
　リビングから出て、右側の部屋のドアを開けると寝室だった。セミダブルのベッド。ベッドカバーはブラウン。
　寝室を出て別の部屋に入る。その部屋は壁一面が本棚になっていた。机の上には原稿用紙。今どき、原稿用紙？
「原稿用紙、たくさんあるね」
「図書館誌に本の紹介とかするだろ。字数が決まっているから、便利なんだ」
「今どきアナログなんて珍しいね。パソコン使えば、文字カウントしてくれるのに」
「デジタル機器って苦手なんだよ」
　むすっとした大ちゃんを見て笑った。オジサンは、パソコンが苦手。大ちゃんも例外ではない。
　本棚の本を見る。小説、科学書、新書、哲学書、古典、詩集。いろいろなジャンルの本。一体、大ちゃんは今までどんな勉強をしてきたんだろう。そして、どうやってこれだけの知識を身につけたんだろう。
　小説のおさまっている棚に、荻野庸の本もあった。まだ図書館に入っていない本もある。
「これ、まだ図書館にないんだよね」
「出たばかりだからね。貸すよ。そう思って呼んだんだ」
　大ちゃんは私に本を渡してくれた。
「ありがとう」
　私は本を胸に抱きしめた。パパが書いた本。パパの気持ちが伝わってくる気がする。
「トイレはこっちだよ」
　大ちゃんに促されて、トイレに行く。内装はうちと似ている。やっぱりミントの香り。
　それからお風呂を見た。
「広いね」
　体を洗う所も、バスタブも広い。「一緒に入ろうか」と冗談ぽく言うので、「また、今度ね」と大ちゃんの得意な台詞で返した。大ちゃんは、「ずるいな」と苦笑いした。口元にしわができる。それがすごく愛おしかった。

「さて、腹減ったな。メシにしよう」
　大ちゃんの食欲は、やっぱり一番の優先事項らしい。
　ハンバーグのひとかけらと、カルボナーラを少量交換した。私は、この後のことで少し緊張しているけれど、大人の男の人はちっともそんなことを気にしていない。この年まで結婚していないのは謎だけれど、それなりに女の人を好きになって、経験もしているんじゃないかと思う。見たこともない人に嫉妬はしないけれど、自分の知らない時間を生きてきたのはなんだか不思議な気がする。
「あの、ご飯を食べて、本を読んで、お風呂に入って、そういうことして、門限に間に合うのかな」
　ハンバーグ弁当を食べ終わった大ちゃんは、時計を見て、時間を逆算した。
「アレ自体は、前と後を合わせても、一時間ぐらいで終わるんじゃない？」
　前はともかく、後もあるのか…。
「そういうもんなんだ」
「そうだね」
　私は、最後のベーコンを口に入れた。
　後片付けをして、手を洗って、二人でソファに座った。私の膝と大ちゃんの膝のちょうど真ん中に、写真集を広げる。ちょっと重い。
　大ちゃんの右腕が私の腰にまわされる。いつもより近くで聞こえる、大ちゃんのやわらかくて低い声。大ちゃんの紡いだ言葉が、優しく空気を振動させて、そして私の耳の鼓膜を振動させて、音楽みたいに聞こえてくる。海の写真を見ているからかもしれないけれど、本当に自然の中にいるみたいで気持ちがいい。
「沖縄の海、きれいだね」
「スキューバとかやってみたくないか？」
「そのうち、旅行しようよ」
　海。朝日。夕日。ギラギラ太陽。虹。雨。
「来年の夏、海水浴に行こうか。ソーキソバ食べに」
「また、食べ物？」
「ソーメンチャンプル、えーと、なんてったか、豚も有名だ」
　海だけじゃない。そこに暮らす人の笑顔。
　写真集を閉じた時に、海の音が聞こえるようだった。目を閉じると、そこには海が広がっているんじゃないかと思った。大ちゃんは何もしゃべらなかった。でも、同じことを思っていてくれていたらいいなと思った。できれば、同じ風景を思い浮かべていたらいいなと思った。
「さっちゃん、お風呂にしようか」
　うなずくと、大ちゃんはソファから立ち上がった。お風呂の用意に行ったんだと思う。いなくなった左側が少しだけ寂しい。
　後を追いかけると、浴室の換気扇のスイッチを入れているところだった。
「五分くらいで用意できるから、先に入っていいよ。バスタオルは」

　そう言って、棚からバスタオルとタオルを二枚出してくれる。ふんわり。うちで使っている柔軟剤と同じ匂いがした。
「あの、やっぱり、お風呂、一緒に入ろ」
　せっかく一緒にいるんだから、できるだけ同じ時間を過ごしたくて言ってみた。
「いいけど」
「そのかわり、絶対じーっと見ないでよ。触るのも駄目だからね。それから、お風呂から出たら、何を着ればいい？その、大ちゃんは着替えもあっていいけど、私は着替え持ってないし、お風呂に入った後に…」
　我ながら注文が多いと思う。でも大問題なのだ。私にとっては。
「気が回らなかった。じゃ、洗うものは洗濯機に入れて。乾燥までやってくれるから。女性の下着って痛みやすいよな。このネットで大丈夫？」
　妙なところまで気が回る。素材のことまで知っているんだ。大ちゃんは、きっと、そういういたみやすい大人の下着を身につけた、大人の女の人と、ずっと付き合ってきたんだ。でも、私のは生憎、勝負下着じゃないし、その辺の量販店で買えるもので。やっぱり、自分の子供っぽさを感じた。
「大丈夫。私が先に入っていい？呼んだら来てね」
「はいはい」
　大ちゃんを脱衣所から追い出した。服を脱いで、洗面台の鏡に自分の体を映す。大ちゃんは、女の人の裸を見るのは慣れているんだろうなと思う。
　胸を寄せたり、あげたりしてみる。そしてため息をつく。馬鹿なことをしていないで入ろうと思った。
　体を簡単に洗って、大ちゃんを呼ぼうと思って、いや、やっぱり…とためらって、髪も体もすごくきれいにしてから、大ちゃんを呼んだ。
　少しして入って来た大ちゃんは、前も隠さないで入ってきて（しっかり見てしまった）、シャワーをじゃーっと浴びて、私と一緒に湯船につかった。お湯があふれる。
　私の裸がお湯越しに見えているはずなのに、まったく表情が変わらない。
　大ちゃんは、手を伸ばして、私の顔に触った。私がびくっとしたので、「あ、ごめん。髪、かんでたから」と理由を言って、手を引っ込めた。
「さっきの写真、さっちゃんはどの写真が気にいった？」
「最後の夕日の写真」
「ああ、あれもいいねぇ」
　大ちゃんが好きな写真はちがうんだと思って、少しがっかりした。
「僕は、おばあちゃんが笑っている写真が好きかな。二番目に好きなのは、夕日の写真」
　同じものが好きだと、少し安心する。
「あの写真は沖縄のどこかなぁ」
「どこだろうね」
「沖縄もいいけど、大ちゃんと行った海もよかったよ。山もあり、海もありで、景色が良かった」

「海って、つながっているんだよなぁ」
　のんきに言って大ちゃんは、ざぶんと湯船から出た。マイペースにわしわしと髪を洗い、がしがしと体を洗った。私が自分の体を洗うのとは対照的に、ずいぶん乱暴に洗うんだなと思った。私ものぼせそうだったので、湯船から上がって、縁に腰掛けた。
　大ちゃんとの年の差を考える。二十五歳。親子ほど年が離れている。私はパパの今の年齢を知らない。大ちゃんと同じくらいなのかな。パパとお風呂に入るってこんな感じ？
　そこまで考えて、でも目の前にいるのは大ちゃんだしな、と思う。相手がパパだったら、この年になって一緒にお風呂に入ったりしない。大ちゃんは、特別なんだ。
　相変わらずマイペースに顔を洗い、髭を剃って、それからまたバスタブにつかった。
　ひげをそってつるつるになった顔を触る。
「剃り残し、ない？」と私に聞く大ちゃん。
「ないよ。すべすべしてる」
「そりゃ、よかった」
　口角が上がる。
　いつの間にかすっかり緊張も解けた。大ちゃんは、私の注文通り、お風呂で体に手を触れることも、私の体をじろじろ見ることもしなかった。だから、大ちゃんが何を考えているかは、相変わらずわからなかった。
　お風呂から上がって、バスタオルを体に巻きつける間もなく、大ちゃんは私にキスをした。キスの合間に、「体を拭きたい」とか、切れ切れに言っても、全然要求にこたえてくれない。それどころか、胸とか、お尻とか、触られてるんだけど。お風呂に入っていたせいか、大ちゃんの体もすごく熱い。「ちょっと、待って」と言っても聞いてくれない。「やだって」と言っても、聞いてくれない。
　そこにいるのは、まぎれもなく男だった。
　男の顔をした大ちゃんは、私の目を見ないで手をとると、そのまま寝室まで引っ張って行って、ベッドに押し倒した。その時初めて男の目をした大ちゃんと目が合った。
　大ちゃんが「ふふっ」と笑った。いつもの大ちゃんに戻っている。
「ごめん、こわかった？」
　それで、ようやく張り詰めていたものが解けた。
「こわいよ。別人なんだもん。野獣みたいだった」
　優しいキスをされる。緊張を和らげてくれているみたい。
「続けていい？」
「私が嫌なこと、絶対しないで」
「はいはい」
　いつもの気のない二つ返事。
　大ちゃんはその後、私が「嫌」っていうことをしつこくして、私を気持ちよくしてくれた。そして、すごく優しく、時間をかけて、最後までしてくれた。大ちゃんと結ばれたのは、私にとってすごく素敵なことだった。
　まどろみの中で、大ちゃんは無意識に私の背中を撫でてくれている。私は、腕の中におさまっ

ている。大ちゃんの物か、自分の物かわからない体温が重なって、とても気持ちがいい。私も緊張が解けて、うとうとしている。体がふわふわする。それから、大ちゃんの寝息が聞こえて、私も安心して眠った。
　目が覚めると、大ちゃんの姿がそこになかった。時計を見て、顔が青ざめる。深夜零時。体に毛布を巻きつけて、リビングに行くと、私の顔を見た大ちゃんは破顔した。
「電話したから。寝てていいよ」
　お母さんになんて説明したんだろう。
　大ちゃんの隣にそのまま座る。ジュースがコップに注がれて、前に出される。コンビニの袋から、カシャカシャとお菓子を出す。そんな大ちゃんの行動をボーっと見る。
「罪を感じるから、その顔はやめて欲しいかな」
「ごめん」
　オレンジジュースを飲む。１００％は酸っぱくて、少しだけ苦い。スナック菓子は、しょっぱい。チョコレートは甘すぎるくらい。
　大ちゃんは、毛布ごと私を引き寄せた。
「体、つらくない？」
「うん。大丈夫。…大ちゃん」
「ん？」
「体が繋がっちゃうと、こうやってまたバラバラになったとき、切ないね」
「さっちゃんは、詩人だ」
「大ちゃん」
「ん？」
「私の初めてになってくれてありがとう。大ちゃんでよかった」
　こらえていた涙があふれた。大ちゃんは優しくずっと抱きしめてくれていた。時々なだめるように、背中を叩いてくれた。私は、ますます大ちゃんが好きになった。
　私、高校三年生。
　大ちゃん、四十三歳。秋の夜。
　静かな、静かな夜。
　この世に二人だけしかいないと錯覚してしまうような夜。

　大学生になった。付属高校からのエスカレーターだったので、さほど苦労もなく進学した。大学の場所も高校と変わらないので、私の図書館通いは続いている。
　新しい友達もできた。美香と恵美子。二人とも外部受験組。入学式の後のオリエンテーションで席が近かったことがきっかけで話すようになった。
　美香にも恵美子にも、高校生の時から付き合っている彼がいる。美香の彼は浪人中。恵美子の彼は、他県の大学に進学したので遠距離恋愛になったらしい。
　私も彼がいることは話してある。ただ、どんな人とか具体的なことは触れていない。二人ともよくしゃべって、自分の彼のことばかり言うので、私は話さなくても会話が成り立っていたというのもある。友達の話を聞くのも楽しいことだった。
　ところが。
「さちの彼って、どんな人？」と、ついに聞かれてしまった。どんな人、と言われても。大ちゃんの顔や、背恰好を思い浮かべる。
「優しいよ」
　それくらいしか触れられない。
「年上？」と美香。
「うん。年上」
「いいなぁ、そりゃ優しいはずだ。どこの大学の人？」と恵美子。
「社会人。市立図書館の司書さん」
　二人は声を合わせて、「大人の男の人かー。いいなー」と言った。どうやら二人は、図書館に通う習慣はないらしく、大ちゃんがどの人かを具体的に想像されることはなかった。
　ホッと胸をなでおろすと、「年上か。で、どうなの？エッチは。やっぱり上手？」、と二人は目をらんらんと輝かせて聞いてきた。
　やっぱりその質問が来たか、と思った。
「うん。その、初めて付き合った人だから、誰とも比べられないというか」
　二人はそれで納得してくれた（深く追求されても、本当にわからないので困る）。
「さち、これから、図書館に行って、彼を紹介してよ。これからレポート書く時とか、資料探す時に手伝ってもらうこともあるかもしれないし」
　好奇心で目がキラキラしている。美香も恵美子も、前にプリクラで彼の写真を見せてくれた。確かに、私だけ何もないのもフェアじゃないかもしれない。それに、私だって、大ちゃんを自慢したい。「素敵な人なんだよ」って。
　入学祝でお母さんに買ってもらった携帯電話で、大ちゃんにメールをした。
“友達と図書館に行ってもいい？よかったら、電話をください”
　十分ぐらいで、バイブが振動した。大ちゃんからの電話だった。
“僕です。いいけど、どうかした？”
「美香と恵美子と図書館に行ってもいい？」
“いいよ。でも、それ、図書館とは関係なくて、僕に用があるんだろう”

　ばれてる。電話の先で大ちゃんが、小さく笑った。
“仕事終わったら、メシ食べようか。安い店でよければ、ごちそうするよ。それでいいかな“
「うん、ありがと」
“五時半に、図書館前で”
　電話が切れた。
　美香と、恵美子を見て、「オッケー。ご飯に連れて行ってくれるって」と言うと、二人は「さすが、社会人」と口をそろえた。
　ブブブ…と携帯が鳴る。大ちゃんからのメールだ。
“今晩、うちに泊らない？久々に、明日休みが取れました。さっちゃんの友達の話も聞きたいな”
　すぐにそれに“いいよ”の返事を出す。
“朝までエッチしよう。声を聞いたら、すごくしたくなった”
　大ちゃんは、こういうメールを時々送ってくる。嫌じゃないけど、やっぱりいまだに恥ずかしい。僕は普段そんなこと考えていませんよ、っていう顔をして、実際すごくスケベだ。仕事中なのに。
　私は、“真面目に働け”と返信した。大ちゃんが、笑っている顔が目に浮かんだ。
　泊るとなると、お母さんにも連絡。
“今日、大ちゃんとご飯を食べて、泊ります”
　この連絡だけは、いまだに慣れない。数分後に返信。
“了解しました。釘をさすようだけど、まだ孫はいりません”
　一連の連絡を終え、おしゃべりに戻る。
「彼、木崎さんっていうんだけど、すごく年上だから」
「そうなの？気にしないよ。いくつなの？」
「二十五…」
「二十五なんて、すごい年上にならないって」
「そうじゃなく、私より二十五歳年上で」
　二人は、「えー！！」と、お約束の大声を出した。その後、私は援助交際じゃないとか、弁解するのが大変だった。二人は本気で結婚詐欺じゃないかとか、心配してくれた。
　時間になって、図書館に行くと、大ちゃんがもう待っていた。右手をあげて、挨拶。私も、右手をあげる。
「こんばんは」
　大ちゃんがにこやかにあいさつした。老若男女に通じるスマイルだ。
「彼の木崎大輔さん。大ちゃん、こっちが美香で、こっちが恵美子」
　美香と恵美子は、挨拶をする前に、「紳士だ！」と言った。大ちゃんは笑って、「いや、普通におじさんだから」と言った。
　立ち話もなんだから、ということで、歩いて近くのファミレスに行った。大ちゃんと時々来るお店で、イタリアン料理とサラダバーを楽しめる。それぞれが、サラダバーと、ドリンクバー、パスタを注文し、みんなで食べるようにピザも頼んだ。

「どんな風に出会ったの？」と早速美香に聞かれた。
「大ちゃんは、お母さんの幼馴染で、私が小さい頃から、顔なじみだったの」
「木崎さん、小さい頃から目を付けていたんですか？」
　恵美子の追求は容赦ない。大ちゃんは、笑った。
「まさか。そこまでロリコンじゃないよ」
「さちが告ったの？」
「大ちゃんの方から、ね」
　大ちゃんは所在なげに、おしぼりで手を拭いている。あんなに拭いたら、手の脂がさらに取れちゃうのに。
「さちのどういう所がよかったんですか？」
　それは、私もはっきりと聞いたことがない。大ちゃんは、いつもはぐらかすから。
「趣味が合うなって思って。本が好きな所もだけど、好きな小説が同じだったから。さて、誘導尋問はこれくらいでいい？サラダバーを取りに行きたいんだが。お腹がすいてしまった」
　大ちゃんは逃げた。食欲が勝ったのではなく、逃げた。
　でも、大ちゃんと私を結びつけたくれたのはパパの小説だったんだな。私は、すごくパパに「ありがとう」って言いたくなった。
　その後の食事で、女子大生の恋愛事情の話になった。大ちゃんは圧倒されることなく、二人のマシンガントークを聞いていた。時々、アドバイスをしたり、質問したり。それがとても新鮮だった。すごく年上なのに、私たちと同じように会話できる大ちゃん。私は、とてもうれしかった。
　大ちゃんが会計を済ませている間、二人に、「ちゃんとした人でよかった」と言われた。
「心配してくれてた？」
「だって、二十五歳も年が離れていたら、怪しいって思うよ。エンコーでも詐欺でもなかったら、すごくキモいロリコン男かって。木崎さんって、すごく素敵な人じゃない」
　恵美子は、「本がきっかけっていいよね。私も今度何か読もうかな」と言った。来館者が増えたら、大ちゃんは喜ぶだろうな。
　二人とは、そのお店で別れた。
　図書館の駐車場に停めてある車に向かう途中、「おもしろい子たちと友達になったね。新規開拓だ」と大ちゃんは言った。
　私、大学一年生。
　大ちゃん、四十四歳。
　街灯が明るくて、月の光がかすむ四月の夜。

　朝、目が覚めると、大ちゃんは隣にいなかった。いつも、私が寝ている間に起き出す。ベッドの下に散らばった服を手早く身につけると、私は寝室を出た。
　リビングで時計を見ると、七時半だった。大ちゃんはそこにもいなかった。
　書斎（と呼んでいる）にいるのかと思って、ノックをすると、「んー、どーぞ」という声がした。
　大ちゃんは椅子に座って、伸びをしていた。机の上には原稿用紙。床にもまるめられた原稿用紙。
「休みの日なのに、仕事？」
「んー。図書館誌のブックレビュー」
　図書館誌のブックレビューぐらいで、原稿用紙はこんなに無駄になるんだろうか。すごく疑問だ。
「いつもこんなに推敲するの？」
「うーん、文才がないからね。読むのは好きだけど、書くのは苦手なんだ。四苦八苦だよ」
　私は床に散らばったくずをゴミ箱に捨てた。
「あ、ごめん」
　大ちゃんも、同じようにゴミ箱に捨てる。机の上の原稿用紙を見る。半端じゃない量だ。「何の本？」と言って、原稿用紙を見ようとしたら、「ダメダメ」と制された。
「図書館誌をお楽しみに」
「はい」
　いまいち釈然としない。
「コーヒー、入れようか？」
　大ちゃんの家にもだいぶ慣れて、最近はそういうこともできるようになった。
「ありがと。僕も終わりにしよう」
「仕事なんだよね。帰った方がいい？」
「さっちゃんが寝てたから書いていただけだよ。コーヒー飲んで、トースト食べたら、散歩にでも行こう。ドライブでもいいよ」
「大ちゃん、あんまり寝てないでしょ？無理しなくていいよ」
「僕は年寄りなので、朝は平気なんだ」
「確かに寝付くのは早いよね」
　大ちゃんはいつだって、ことが済むとさっさと寝てしまう。私にすべてを預けて、油断しきった顔で眠るのだ。私は、大ちゃんのその顔を見るのが好きだった。
「あらためて指摘されるとショックだけど、男って生き物は、アレの後は眠くなるものだよ。さて、コーヒー飲んだら散歩に行こう」
　大ちゃんに促されて、書斎を出た。

「大ちゃんはさ、パパのこと知っているんだよね」

　ママレードとバターたっぷりのトーストにかじりつく。このママレードは、私の為の物。大ちゃんは、いつもバターだけ塗って食べる。
「知ってるよ」
　コーヒーを飲みながら大ちゃんは言った。
「今、どこにいるのかな」
「さぁ。会いたい？」
「うーん。会ってみたい気もするし、そうじゃない気もする。お母さんにも悪いし」
　離婚のいきさつは知らない。でも二人が離れているということは、何か事情があったはずだ。私には、パパの記憶がない。お母さんが、この年まで一人で育ててくれた。だから、いまだにパパに愛着を持っているなんてお母さんが知ったら、悲しむ気がするのだ。
　それにパパは、一度も会いに来てくれない。私のことなんかどうでもいいのかもしれない。新しい家族がいて、忘れているのかもしれない。
　大ちゃんにはわかって欲しくて、拙い言葉で、とぎれとぎれに話した。
「麻美に聞いたんだけど、さっちゃんが二十歳になるまで、月に五万の養育費を入れているみたいだよ。銀行振り込みの機械的なものかもしれないけれど、ちゃんと働いて払っているってことじゃないかな。だから、さっちゃんが忘れられてるってことはないよ」
「大ちゃんは、私のパパが荻野庸だって知ってるの？」
「ああ」
「知ってて、パパの本をすすめてくれたの？」
「そうだね。計算高くてがっかりした？荻野庸の本をすすめて、僕もその本が好きだと言えば、付き合ってもらえると思った」
　その作戦に引っかかったのか。運命的だと思ったのに、昨夜、美香と恵美子と話した時に、すごく感動したのに。
「あんまり、運命的じゃなかった。それはがっかりかも」
「荻野庸は、僕の大好きな作家だ。それは本当」
　そんな姑息な手をつかうほど、私と付き合いたかったのかな。それは嬉しいけれど、少し引っかかるものがある。ただ、それがなんなのかよくわからなかった。
　トーストを食べて、外に出た。桜は散ってしまったけれど、木には別の花がついている。心地よい風。花のいい香りがする。この季節が好きだ。
　私、大学一年生。
　大ちゃん、四十四歳。
　季節の心地よさと裏腹に、心が晴れない春の朝。

　同棲はしないまでも、大ちゃんの家に泊るのが当たり前になった。私も慣れて、お母さんにメールを打つ時に顔を赤らめることもなくなったし、大ちゃんが夢中になって私にしてくれることも好きになった。
　泊ることが多くなれば、当然、大ちゃんの生活も垣間見ることになる。潔癖症なほど清潔で、この年でオヤジ臭はない。お酒は飲まない。煙草は吸わない。自炊はしない。朝ご飯はトーストを二枚。その後、晴れていれば一時間の散歩。それから、外でデートしない時は、二人で本を読む。几帳面に、一日の内容が決まっている。
　謎なのは、常に私が起きる前に起きていて、書斎で何かをしているということだ。そんなに家でする仕事があるのだろうか。その疑問だけは、未だに消えない。
　いつものように大ちゃんが寝てしまって、私だけ眠れずに天井を見ていた。体の火照りが消えない。大ちゃんはいつも、しばらく忘れられないほどの火照りを残してくれる。
　私は、水を飲みに裸のままベッドを出た。キッチンで水道水を飲んで、何か読む本はないかと書斎に行く。
　机の上に、原稿用紙。
　出来心だった。
　何が書かれているのか、次の図書館誌のブックレビューは何か。本のタイトルを知りたいだけだった。
　そこにあったのは、膨大な文章だった。断片的なストーリー。完成されてはいないけれど、恋愛小説だ。
　少し読んだ時は、あまりに文章が途切れているので、「文才のない大ちゃんが、実は小説家を目指している」のかと思った。
　でも読めば読むほど、特徴的な文章だった。
　男女の会話。淡々とした文章。美しい風景の描写。
　それは、まさしく荻野庸の文体だった。私が何度も読み返した、パパの文章そのものだった。
　怖くなって、書斎をそのまま出た。
　どうして、大ちゃんが？寝室に戻れない。
　恐ろしいことばかり考える。
　実は、私の本当の父親は大ちゃんで、私たちは近親相姦している可能性。
「不潔だ。この仮説」
　自分で思いついて、毒つきながら、すぐ矛盾に行きつく。その場合、私たちの付き合いをお母さんが認めてくれるはずがない。私はほっと胸をなでおろした。
　大ちゃんが、荻野庸の原稿を何らかの理由で預かっている可能性。
「妥当な線だ」
　呟いて、矛盾を探す。この仮説が正しければ、大ちゃんは私に「パパのいる場所は知らない」と嘘をついていることになる。そして、一番の問題は、なぜ原稿を預ける必要があるのか、ということ。大ちゃんが、書斎で原稿用紙に向かっている説明もできない。いつもは仕事をしていて

、たまたま今日だけ原稿を持っているのかもしれない。でも、この仮説もやっぱりすっきりしない。
　大ちゃんが荻野庸になり済ましている可能性。これこそ、何のために？印税はすべて、荻野名義だろうし、文章を書く人間が自分を主張しないってありうるのか。
　大ちゃんが荻野庸のゴーストライター。大ちゃんは、実はパパに子供の頃から苛められていて、その支配から逃れられない。
「ばかばかしい」
　結局、推理は暗礁に乗り上げ、私はベッドに戻った。寝ぼけたように大ちゃんが、「どうした？眠れない？」と聞いてくる。
「ちょっとのどが渇いただけ」
　それには答えずに、やっぱり寝ぼけて、体を私に寄せた。右手を私の胸に伸ばし、少し触ると、安心したように寝息を立てた。
　私、大学一年生。
　大ちゃん、四十四歳。
　釈然としない、真夏の寝苦しい夜。

　探偵の真似ごとだった。パパの初期の小説が探偵小説だった。その探偵のまねごとをしたいだけなのかもしれない。真実を知りたい好奇心、知って傷つくことの恐怖、両方が入り混じっていた。
　人の文章を盗み見る。大ちゃんの頭をのぞき見る行為。抵抗や、罪悪感がなかったわけではない。でも、知りたかった。
　眠れない夜、私は必ず、罪を犯した。
　二回目にのぞき見た時、やはり原稿はそこにあった。パパの物を預かっているだけではなさそうだと思った。
　三回目に見た時、主人公が何か苦しい恋をしていることがわかった。
　そして、四回目に見た時、主人公の男性は、年の随分離れた女の子と恋をしていることがわかった。それは、今の私と大ちゃんそのものだった。
　男は随分年の離れた女の子と恋をする。自分の老いと葛藤する男の話。
　この小説を書いているのは、まぎれもなく大ちゃんだ。

　季節はめぐる。秋が来て、冬が来て、春が来て、そして、じめじめした梅雨の季節になった。
　何も知らない顔をしている、私。平気で嘘をつける、そんな一面があったのかと驚いた。なぜ、黙っているのか。それはやっぱり、嫌われたくないからだと思う。勝手に盗み見た後ろめたさ。自分に失望して、そんな自分を見せたくないと思った。離れたくなかった。
　その時に聞けばよかったんだろう。私は完全に機会を失った。
　その日は、大ちゃんがパソコンバッグを持っていた。
「どうしたの？それ」と聞くと、デジタル嫌いの大ちゃんは、「知り合いにもらった」と言った。そして、この期に及んで、「よくわからないから、教えて」と言った。
　その中にデータが入っていると思った。大ちゃんが書いたもの。あるいは、パパが書いたもの。
　私も嘘をついている。大ちゃんも嘘をついている。
　その夜、大ちゃんが寝てから、パソコンを起動した。
　パスワード画面が現れる。大ちゃんが、好きな言葉。
”hope”
　ログインできない。
”endousachi”
　自分の名前を入力して、恥ずかしくなった。そして、ログインできないと知って、がっかりした。
”oginoyou”
　やっぱり、ログインできない。画面には、
”パスワードを忘れてしまいましたか？”と出ている。悔しかったけれど、クリックすると、ヒントが出てきた。

”初めて吸った煙草の名前”
　思いつく限りの煙草の銘柄を入力する。「ハイライト」「マイルドセブン」「マルボロ」「若葉」。五回目に、
”sevenstar”
　と入力した時、大音量のログイン音で、デスクトップ画面になった。デスクトップに「小説」のアイコン。それをクリックする。ファイルがいくつも表示される。
　タイトルは、すべて、荻野庸の出版した長編小説のタイトルだった。
　知らないタイトルが二つある。「殺人者の夜」、そして、「少女と幽霊」。私が散々盗み見た作品は、「少女と幽霊」だろう。ファイルをクリックすると、ワープロソフトが起動した。
　その時、書斎のドアが開いた。大ちゃんが無表情で立っていた。私は、何も言えなかった。謝ることもできなかった。大ちゃんは、いつものように優しく笑って、「ログインできた？」と聞いた。それにも答えられなかった。
　部屋に入って来た大ちゃんは、パソコンをじっと見た。
「できたみたいだね。わかってるのかな、さっちゃんがやったことは犯罪だ」
　優しい口調。その瞬間、すごく怖い人だと思った。何を考えているのかわからない。ふと「殺人者の夜」というタイトルが頭に浮かんで、私は身を固くした。口が渇いて、声が出せない。どちらの小説も大ちゃんが書いたものだろうか。
「それ、完成してるよ。とっくにね。八月頭の、さっちゃんの二十歳の誕生日に二冊同時発売される本の原稿だ。一足先に読む？」
　私は首を横に振った。
「さっちゃんが夜中に書斎で何かしていることは知ってた。原稿が時々動いていたから。パソコンを持ってくれば、興味を持つだろうと思った。罠にはめた」
「ひどい」
「どっちが？」
　大ちゃんは、パソコンをシャットダウンすると、書斎を出た。私もそれについていく。
「罠にはまらなかったら、どうするつもりだったの？」
「なかったことにするつもりだった」
　でも、私は見てしまった。
「これから、どうするの？」
「そうだな。とりあえず、探偵さんの推理を聞こうか。これを書いたのは誰なのか。そしてその根拠」
　手書き原稿を見たうえで、今回のファイルを確認した。書いたのは、大ちゃん。大ちゃんが、荻野庸のゴーストライターをしている。
　大ちゃんに、そう伝えると。
「ご名当」と大ちゃんは言った。
「ただし、”少女と幽霊”を書いたのは僕だけど、”殺人者の夜”を書いたのは、本物の荻野庸だ。さっちゃんのお父さん、本名は荻野目庸次」

　初めてパパの本名を知る私。
　私は、パパに会いたいと思っていた。本名すら知らないまま、知ろうとしないままに。
「どうして、ゴーストライターなんて」
「さっちゃんのお父さんは、僕が荻野庸を語っていることを知らない。つまり、僕は、荻野庸の名前で勝手に小説を出している。僕自身、犯罪者と変わらないことをしている」
　大ちゃんの目は笑っていなかった。その代わり、私の目を真正面からしっかり見ていた。何を考えているかわからない顔ではない。真面目な話をする大ちゃんの顔だ。恐怖が和らいだ。
「庸ちゃんは、処女作がミステリー大賞を受賞して、一気にベストセラー作家になって、その作品は映画化までされた。最初に、うまくいきすぎたんだ。その結果、プレッシャーに負けて、精神を病んだ。それでも、血を吐く思いで書いていた。五作目を書き終えて、彼は書けなくなった。一方の僕は、応募しても、一次止まり。僕は、彼が書けなくなったのを利用して、荻野庸の名前で恋愛小説を書いた。荻野庸というブランド名だけで、みんな読んでくれた。僕は、書き続けた。汚い手を使っても人の目に触れる物を書きたかった」
「パパは、今、何をしてるの？大ちゃんがそんなことをしているのを知らないほど悪いの？もう一つの方を書いたのは、パパなんだよね？それに、どうして書けなくなった時点でやめなかったの？大ちゃんは自分の欲だけで書いたわけじゃないよね？」
「もう一作の方を書いたのは、さっちゃんのお父さんだ。原稿も僕が受け取った。それをパソコンに打ち込んだ。さて、ここでさっちゃんに選択権を与えます」
　大ちゃんは、あらたまった言い方をした。
「今、さっちゃんは、”パパは、大ちゃんがそんなことをしているのも知らないくらい悪いの？”と言った。そのあとで、”大ちゃんは自分の欲だけで書いたわけじゃないよね？”と言った。さっちゃんは、庸ちゃんを擁護しつつ、僕も擁護する。真実を知っても傷つきたくないからだろう。
僕は、自分が傷つかないで情報を引き出すのは、ずるいと思う。だから、庸ちゃんか、僕か、選んで欲しい。僕を選べば、庸ちゃんが今何をしているか、どこにいるのかを教えよう。庸ちゃんを選ぶのなら、僕は何も話さない。さっちゃんとも二度と会わない」
「そんな選択」
「僕は、もうひと眠りする。朝までに決めて」
　大ちゃんは冷たく言うと、寝室に消えた。
　私、大学二年生。
　大ちゃん、四十五歳。
　梅雨末期の夜。長い夜。その選択は私には重すぎて、すぐに大ちゃんを選べなかった自分も悲しくて、すべてなかったことにできたらいいのにと思った。

　眠れなかった。
　雨の音がする。今年は、梅雨明けが遅い。
　大ちゃんと私は取引をした。すぐに大ちゃんを選べなかったのは、今、パパの名前を選ばなかったら、すごく冷たい人間じゃないかと感じたから。
　大ちゃんの提示した条件は好条件だ。大ちゃんを選べば、パパの情報も手に入って、大ちゃんも離れていかない。
　でも、大ちゃんがこんな条件を提示してきたっていうことは、パパの真実はすごく重いということじゃないだろうか。私は、それを受け止めなければならない。覚悟は決めた。
「おはよ」
　いつもと変わらない様子の大ちゃんは、コーヒーメーカーにひいた豆をセットした。
「大ちゃん、私、大ちゃんを選ぶよ。大ちゃんが書いた小説、すごく好きだし。それに、大ちゃんが私とつきあったきっかけは、荻野庸本人の作品よりも、ゴーストの作品を好きだって言ったことだって、信じたい」
　大ちゃんは、自分の作品を褒めてくれて、嬉しかったんじゃないだろうか。
　コーヒーメーカーから蒸気が上がって、プシュプシュ音がした。すごくいい香りが漂ってくる。
「僕が、さっちゃんに選択肢を与えたのは、昨日言った理由だけじゃない。それだけ、真実は重いってことだ。僕なら、きっとさっちゃんを守ってあげられる。真実を知ったとしても」
　私は頷いた。
「大ちゃんを信じるよ」
　大ちゃんは、マグカップを二つ用意して、それぞれにコーヒーを注いだ。片方のカップを私に差し出す。私はソファに座り、大ちゃんはテーブルをはさんで、向かい側に座った。
「庸ちゃんは、犯罪者になって、服役したんだ。そのことを世間に知らせないために、僕は書いた。荻野庸の作品を守りたかった。もちろん、昨日も言った通り、僕にも欲があった」
　パパが、犯罪者？服役するくらいだから、かなりの事件を起こしたのだろうか。
「犯罪って、何をしたの？」
　大ちゃんは、少し考えた。言葉を選ぼうとしている。
「はっきり言っていいよ」
「連続通り魔。それぞれ別の日に、三人を刺した。不幸中の幸いで、被害者は怪我で済んだ。後遺症も残っていない。慰謝料も払い終わっている」
　通り魔。その言葉に愕然とする。人を殺そうとしたなんて。そして、私にもその血が流れている。人を殺そうとした人の血。声が震えそうになって、深呼吸する。
「どうして、そんなこと」
「彼は狂っていた。読者が喜ぶミステリーにこだわり過ぎた。読者は過激だ。複雑なトリックに飽き足らず、殺人ゲームを好む読者が増えた。次々と人が刺されていく。そのスリル感を、通り魔の視点から書きたかったらしい。錯乱状態だったんだろう」

「そういうのって、精神鑑定とかにはならないの？刑罰が軽減されるはずだよね」
「被害者が望むと思う？罪を犯したのに精神鑑定で罪が軽くなることを。庸ちゃんもそれを望まなかった。正気な時もあるんだ。そんな時、彼は、とにかく裁判を早く終わらせたがった。そして、自分の罪が世間に知れて、荻野庸というブランド名が傷つくことを恐れた。庸ちゃんは、当分の原稿はこれで頼むと僕に短編を渡してくれた。その原稿の文字は、読めないくらいだった。誰も読めない文字を彼は書くようになっていた。病気が進行してね」
「パパは、まだ刑務所に？」
「刑期を終えて出所して、今は、Ｎ県の病院に入院している。“殺人者の夜”は、荻野庸最後の作品になると思う。別の病気で、もう長くない。さっちゃんは、庸ちゃんの名前すら知らなかった。顔すら覚えていない。このままでいいのか？って僕は思った。庸ちゃんのことを、さっちゃんに知ってもらいたいと思った。それは僕のエゴかもしれない。でも、庸ちゃんの苦しみや考えも知って欲しかった」
「それなら！言ってくれれば良かったのに。パパの具合が悪くて、死ぬ前に会って欲しいって。こんな罠にはめるような真似しなくたって、言ってくれれば会いに行くし！」
「そうだな。でも、僕もできたらさっちゃんに聞いて欲しかった。小説を書いているのかって。隠れて何度も読むような真似をしないで。遠慮しないで、今みたいに怒ってくれてよかったんだ。僕が年上だから遠慮したのかな」
　私たちは冷めたコーヒーをほとんど流しに捨てた。
「それじゃ、さっちゃんのパパに会いに行こうか」

　パパの入院する病院に向けて、車が発進した。梅雨末期の雨がすごい。大ちゃんは、ラジオをＡＭに切り替えた。
「精神鑑定して、無罪になって欲しかった？」
　それはわからなかった。私はそこまでパパが身近じゃない。もし、パパが無罪になったら、罪が軽減されたら、うれしかっただろうか。自分と血のつながった人間が、人を刺したにもかかわらず、罪を償わずに生活している。私自身許せるだろうか。私自身に、狂った人間の血が流れているということを死ぬまで抱えていかなければならない。耐えられるのだろうか。
「実際に、罪を犯した被告人の家族はどう思うんだろう。精神鑑定の裁判の報道のたびに僕は思っていた。たとえば、検察が死刑を求刑したとする。生きて欲しいって思うかな。被告人が死刑になれば、なったで、“死刑になった人の家族だよと後ろ指を指される”、罪が軽減されれば、“罪を犯したのに許されるのはおかしい。あの家は、精神異常者の住んでいる家だ”とバッシングを受ける。どのみち、地獄だよね。おそらく、被告人が死ぬまでは地獄が続く。庸ちゃんは、罪を償いたいと思ったんだろう。被害者家族も、もちろんそれを望んだはずだ。それから、先に言っておくけど、これから行く病院は、精神科の病院なんだ」
「パパはやっぱり狂っているの？」
「精神科の病院に狂った人が入院しているとは限らないんだよ。狂った人って言い方も差別的かな。つい、使ってしまうけど。行けば分かるけど、気持ちの優しい人も多いし、話してみれば

なんてことはない。ちょっと疲れて入院なんて人もいる。どうして、そんなに精神科が偏見を持たれるのか」
「叫んでたり、怖いイメージがあるよね。映画の影響もある。それに、連続殺人犯が精神鑑定を受けるなんて聞くと、やっぱりおかしい人なんだって思っちゃう」
「確かに、精神疾患を抱える人が罪を犯すこともある。でもその割合が数パーセントだって知ってた？ハンディを抱えていない人の方が犯罪を犯しているんだよ。マスコミは、狂ったように精神鑑定って言うだろう。そして、無責任にもその逆は報道しない。国民全体が精神疾患にアレルギー反応を起こしているんだ。多分庸ちゃんは自分がそういうことになったからこそ、ハンディを抱えても真面目に働いているたくさんの人を、ほとんどの人を、巻き込みたくなかったんだろう」
「パパって、まともなんだ」
　大ちゃんは、口元をほころばせた。
「変動が激しいけどね。だから、庸ちゃんのそういう思いを汲んで欲しい。テレビや、新聞や、インターネットに踊らされるなって、さっちゃんへのメッセージだと思うから」
　私は、車の中で眠った。ＡＭラジオから流れる、ニュース番組のアナウンサーの声が心地良かった。
　目が覚めると、どこか見たことのある風景だった。この道は通ったことがある。もう少し行くと、海が見える。
「この辺に、海水浴に来たよね」
「そうだね」
　去年もおととしも連れてきてもらった。二人で、サザエのツボ焼きと、ラーメンを食べた。海で泳いだ。今年の夏も来られるのかな。お見舞いと兼ねてだから、海水浴どころじゃないかもしれないけれど、何度も来たい思い出の海だ。
「丘の上に見えるグレーの建物がそうだよ」
　大ちゃんは、丘の方を指差した。
　私、大学二年生。
　大ちゃん、四十五歳。
　雨がいっそう激しくなった。

　病院は二階建てだった。恥ずかしいことに、「精神科」の病院にすごく偏見があった。「閉じ込められている」というイメージ。でも、その病院は違かった。
「今日は天気が悪いからだけれど、天気のいい日は、患者さんが外でガーデニングをしたり、畑仕事をしたりしているんだよ」と大ちゃんは教えてくれた。
「精神病院って、鉄格子のイメージが強いかもしれないけれど、多くの病院が変わってきているんだよ。外国では、もっと医療体制が進んでいて、普通の人と同じように生活して、町の人がサポートする体制の所もあるんだ」
　病棟の入り口は、さすがに二重扉になっていた。でも、木目調の引き戸で、あたたかい感じがした。
　入ると、いろいろな人が挨拶をしてくれた。ごく普通の人たちだ。私と何も変わらない。中には、具合が悪そうな人もいたけれど、それは、風邪をひいて具合が悪いのとあまり変わらないように見えた。私は自分の無知を恥じた。
「調子がいいといいんだけどな。天気が悪いと、具合が悪いこともある」
　パパの病室は、二人部屋だった。同室の人は、私とあまり変わらない年に見えた。
「こんにちは」と挨拶すると、その人は会釈をした。おとなしそうな人だと思った。
　パパは大ちゃんに「おう、よく来た」と声をかけた。大ちゃんも、「元気そうだな」と言った。
「いや、元気じゃないさ。こっちが、だめみたいだ」と、パパは、お腹をさすった。
「ところで、大輔、また女を変えたのか」
　大ちゃんは、私以外にもここに女の人を連れてきたのかな？大ちゃんの方を見ると、ウインクした。話を合わせて欲しいということみたいだ。
「はじめまして。さちと言います」
「へぇ、かわいい子だな。まったく、お前はさ、中学ぐらいまでいじめられっ子だったくせに、高校に上がってからもてやがって。なぁ、さっちゃん、俺とこいつとどっちがいい男だと思う？」
　パパが、私を「さっちゃん」って呼んでくれた。
「答えにくい質問をしないでくれるかな」と言って、大ちゃんは笑った。
「麻美は、どうしてる？」
「元気だよ」
「俺の小説、売れてるかな。あいつ、困ってないか？」
「庸ちゃんの書く作品は、いつだってベストセラーだ」
「なぁ、大輔、俺に何かあったら、麻美を頼むよ。それから、子供…、なんて言ったっけ」
　パパは、そう言って頭を押さえた。それから、私の顔を見た。
「さち、君と同じ名前だ。奇遇だなぁ」
　私は、涙をこらえた。おそらく、パパに時間の感覚はないのだろう。私が娘だってこともわからない。

「大輔、書けないんだ。麻美を養えないよ」
　沈んだ声でパパは言った。
「大丈夫、一週間後に本が発売される。そしたら、またお金が入るから。発売されたら、真っ先に持ってくる。装丁も気に入るぞ」
「書けないんだ…、大輔。どうやって、人を刺すのかわからないんだよ。なぁ、大輔、何人刺しても、感覚がつかめないんだ。どうしたらいいかなぁ。人を…刺し足りないよ…」
　パパの目が怪しく光った。そして、私を見た。
「次は、どんな風に殺したらいいかなぁ。みんな、どういうのを喜ぶかなぁ」
　緊張でのどが貼りつく。パパが、怖い。
「麻美、麻美なんだろう！俺を騙しやがって。なぁ、俺以外の男はどうだったんだよ」
　パパが、すごい力で私の両手首をつかんだ。痛い。怖い。
「庸ちゃん、麻美は、裏切ったりしない」
　大ちゃんが、パパをなだめて、私と引き離そうとする。
「大輔、お前も麻美とグルなんだろう。なぁ、麻美とやったんだろう」
「僕は、そんなことはしていない。庸ちゃんを騙すはずないだろう」
　その時、白衣を着たお医者さんが入って来た。茫然と、同室の男の人が、ナースコールのボタンを持ったまま立っていた。
「荻野目さん、注射しますね」
　パパは、嫌がったけれど、看護婦さんに押さえられて、すぐにおとなしくなった。注射を打たれたパパは、「あんた、麻美に似ているな」と言った。そして、少しぐったりとして、ベッドに横になると、寝息を立て始めた。
　大ちゃんが、ハンカチを渡してくれた。その時になって初めて、自分が泣いていることに気付いた。一度気付くと、涙はいっそう止まらなくなった。私は、声をあげて泣いた。パパの眠る病室で、病院の先生や、看護婦さん、ほとんど話したことのない同室の患者さんの前で、大声で泣いた。
　私、大学二年生。
　大ちゃん、四十五歳。
　空も、大声で泣いていた。

　ラジオのＡＭで、道路の通行止め情報が流れていた。大ちゃんは、地図を取り出した。
「峠道、封鎖されちゃったな。高速使って、遠回りする手もあるけど、この雨じゃ５０キロ規制だろうし。どこかに泊まって、天気の回復を待つしかないな」
　後部座席に地図を放り投げた大ちゃんは、そう言って、アクセルを踏んだ。
　私の涙はもう止まっていたけれど、腫れた目を見せたくなくて、ずっと窓の方を見ていた。マスカラだって落ちて、きっと、パンダみたいになっているはずだ。
　車をしばらく走らせ、大きな駅の近くのシティホテルの駐車場に大ちゃんは車を停めた。
スタスタと歩いていく大ちゃんの後ろを、小走りでついていく。
　フロントで、大ちゃんは、「すみません、部屋、空いてないですか？」と聞いた。フロントにいた男の人が、あからさまに、私たちをじろじろ見た。
「すみませんが、本日は満室になっております」
「そうですか。わかりました」
　あのフロントの人は、私たちを値踏みした。怪しい二人だと思った。だから断った。駐車場があんなに空いていたのに。そうとしか思えなかった。
　結局、車は駅の近くのコインパーキングに停めて、私たちはラブホテルに入った。大ちゃんが、無関心に部屋を選んで、鍵を受け取り、部屋に入った。独特の匂いがした。
「疲れただろ？先に風呂に入っていいよ」
　私は素直にそれに従った。
　バスルームで鏡を見ると、パンダ目にはなっていなかったけれど、目がすごく腫れていた。体を洗って、お風呂に入って、それで出た。大ちゃんに早く抱きしめて欲しかった。
「さっぱりした？」
　大ちゃんがベッドから立った。
　私は、大ちゃんのシャツを脱がせて、ズボンのベルトに手をかけた。
「シャワー、浴びてくるから」
「いいから、すぐに抱いてよ」
　大ちゃんがいつもしてくれるみたいに、体中にキスをする。今日あったことを、忘れたくて、大ちゃんに抱かれて、おぼれたくて、ひたすら大ちゃんを求める。
「ごめん、さっちゃん。できないみたいだ」
　大ちゃんは、申し訳なさそうに言った。
「さっちゃんだけでも、気持ちよくしてあげるよ」
「やだ、そんなの意味ない」
　私は、ベッドにもぐりこんだ。大ちゃんが、ため息をついて、もう一度「ごめん」と言った。
　大ちゃんが、シャワーを浴びに行って、ベッドに寝転がったまま、いろいろ考えた。
　パパのこと。お母さんとの離婚原因は何だったんだろう。お母さんの裏切りだったんだろうか。
　私も、いつかパパみたいになってしまうんだろうか。

　シャワーを浴びて、バスルームから出てきた大ちゃんは、部屋からも出ていった。五分くらいして戻ってきて、部屋の片隅の椅子に座った。
「煙草、吸ってもいい？」
「いいよ。セブンスター？」
「そうだよ」
　大ちゃんのパソコンのパスワード。
　見なければよかった。知らなければよかった。そしたら、私は傷つかずに済んだのに。
「お母さんは、パパを裏切ったの？」
「いや。全部、庸ちゃんの妄想なんだ。嫉妬深くて、最後には麻美の行動をすべて監視するようになった。ちょっと買い物に出かけて、帰ってくるだけでも、彼はすごく疑って、暴力までふるうようになった。僕は何度も別居や、離婚を勧めたけれど、麻美は”でも、いい人だから”って言うんだ。二人を見ているのがつらかった」
「離婚の決め手は…何だったの？」
「さっちゃんだよ。さっちゃんの言葉が出なくなったんだ。二人とも、さっちゃんだけは守りたくて、離婚を決意した」
　私がいなかったら…。
「大ちゃん」
　大ちゃんは、煙を吐き出した。
「やっぱり、気持ちよくしてもらってもいい？」
　大ちゃんは笑って、「いいよ」と言った。
　大ちゃんは、いつもよりずっとやさしく、私を愛してくれた。でも、体の何かが拒絶して、私は大ちゃんの指すら受け入れられなかった。こんなことは、初めてだった。
　私たちは、その晩、一言も口をきかないで眠った。
　私、大学二年生。
　大ちゃん、四十五歳。
　夜が明けると、空はきれいに晴れ上がっていた。

## 発売

　私の誕生日に、荻野庸の最新作が、二冊同時に発売された。いろいろな本屋さんを回ったけれど、どの本屋さんでも平積みされて、大きな書店では「荻野庸フェア」まで開催されていた。私は二冊とも買った。
　実は、大ちゃんとはあの日送ってもらって、別れて以来、一度も会っていない。大ちゃんが私の体を拒絶したことや、私自身が受け入れられなかったことが、とてもショックだった。
　私の浮かない顔を心配した、美香と恵美子が声をかけてくれて、カフェでお茶をすることになった。
「木崎さんと、何かあったんでしょ。そんな顔してる」
「もう一週間、連絡取ってないんだ」
「ケンカしたの？」
　気まずくなった原因。それは、パパのこともある。でも、一番は。
「男の人ができない時って、どういう時かな。私に魅力を感じなくなったってことかな」
　二人は吹き出した。
「笑い事じゃないんだって！！」
　私がふくれると、「ごめん」と笑って二人は言った。
「年齢的なものもあるだろうし、精神的なものもあるみたいだよ。男って、どんなに偉そうにしてても、結構ナイーブらしいから。木崎さんも、なにかナーバスになるようなことがあったんじゃないの？」
「あの、私も受け入れられなかったんだけど、そういうことある？」
「そりゃ、あるよ。うちの彼とか強引にやっちゃうけど。木崎さん、大人だし、やさしいから、大切にしてくれているんじゃないの？」
「そういうものかな」
「そういうもんだって。そんなことで臍曲げてないで、会いに行ったら？木崎さんだって、気にしてると思うよ。男にとって、結構重要な問題みたいだから」
　私は、アイスココアを飲み干すと、先にカフェを出た。
　図書館の大ちゃんに会いに行くために。

　図書館は、静かだった。カウンターに大ちゃんはいなかった。学習室に行ってみる。そこにもいない。本を並べているかもしれないと思って、図書館中を探す。それでもいない。
「あの、木崎さんは、今日はお休みですか？」と、カウンターの女性に聞くと、その人は奥にいた別の女性を呼んだ。この人は、よく図書館で見かける人だ。
「木崎さん、辞表出して、やめちゃったのよ。あまりに急だったから、館長が”せめて一カ月考えてくれ”って、辞表を預かった状態なんだけど」
「すみません。ありがとうございました」
　大ちゃん、何を考えているの？
　私は、大ちゃんのマンションへ足を運んだ。インターホンを鳴らしても返事がない。ドアには

鍵が掛かっている。ドアに耳を当てて、中の様子を探るけれど、物音一つしない。
　下に降りて、駐車場を見る。車がない。
　大ちゃんが、どこかに行ってしまった。
　頭が真っ白になった。
　家に帰るまで、大ちゃんの行きそうなところを考えた。私は、大ちゃんの実家も知らなければ、私生活についても知らない。何にも知らない。
　私は、パパのことも、大ちゃんのことも、結局のところ何も知らなかったんだ。私よりも、きっとお母さんの方が詳しい。無性にそれが悔しかった。
　家に帰って、大ちゃんの家の電話にメッセージを残し、携帯に電話をかけた。
”おかけになった電話番号は、現在使われておりません。番号をお確かめの上…”という、事務的なアナウンスが聞こえた。
　泣きたい。でも、泣いている場合じゃない。とりあえず、お母さん帰ってくるのを待って、助けを求めよう。
　私は、大ちゃんが書いた、荻野庸の作品「少女と幽霊」を読んだ。私が、原稿を盗み読みした時と、随分雰囲気が変わっていた。
　はつらつとした少女、それに対して老いていく男。男は、大ちゃんと同じ。冴えないゴーストライターという設定だった。
　少女が、男を「好き」と言えば言うほど、男は切ない気持ちになる。自分はあとどれくらい生きられるんだろう。少女といられるのはどれくらいだろう。それならいっそのこと、身を引いた方がいいのではないか。そして、彼女をずっと見守る、幽霊のような存在になった方がいいのではないか。
　男は、一人少女の前を去り、そして最後はひとりぽつんと海を眺めるシーンで終わっていた。
”きみがだいすきでした。きみといっしょに見た海を一生のおもいでにしたいとおもいます”
「何よこれ！だから何だっての！何を言いたいのよ！一人で思い出にするな！」
　まるで、死んじゃうみたいじゃないの。ひとりで、本当に遠くに行っちゃうみたいじゃないの。
　まさか本気で？
　もう一度、大ちゃんの行きそうなところを考える。”発売されたら、真っ先に持ってくる”って、パパに言っていた。大ちゃんは、病院に行くはず。思い出の海は、あの海水浴場しか考えられない。
　私、二十歳。
　大ちゃんは今、側にいない。

　お母さんが帰って来た。こんな時なのに、少しお酒を飲んだみたいで、アルコールの匂いがする。
「お母さん、車を出して欲しいの。酔いがさめたら、できるだけ早く。大ちゃんが、死んじゃうかもしれない」
「はぁ？大輔にそんな意気地があるわけないでしょ」
　私は、発売された二冊の本をお母さんに見せた。お母さんは、「殺人者の夜」を手にとってページをめくった。
「あの人、まだ書いていたんだ」
「まだ…って、ずっと書いていたじゃん」
「私の目はごまかせない。恋愛小説は、あの人は書かないから」
　お母さんは、文を読むという風ではなかったけれど、愛おしそうに、ページをめくって行った。そして、最後のページを見た。驚いたように、目を丸くしている。
「どうかしたの？」
　お母さんから本を受け取って見ると、そこには、印刷されてはいるが、ペンで、次のように書かれていた。
”私、荻野庸は、身体的、そして精神的不調により、作家生活に限界を感じました。勝手ながら、本作品を最後に筆を折ろうと思います。今まで、私の作品を読んでくださり、ありがとうございました。それでは、また会う日まで。さようなら。　荻野庸”
「お母さん、私、パパに会ったの。話せば長くなるんだけど、大ちゃんと会いに行ったの」
「ヨウがいる場所を知っているのね？」
「うん。Ｎ県の海水浴場のそばの精神病院に入院してる。別の病気でもう長くないって」
「どうして、言わなかったの！」
「だって、お母さんに悪いって思って。パパに会いたいなんて思ったら、一生懸命育ててくれたお母さんに悪いって。私のせいで離婚したんでしょ。私がしゃべれなくなったから」
「大輔に聞いたのね？見つけたらただじゃおかないから、もう、タコ殴りにして、つるしあげてやるから」
　我を忘れたようにお母さんは激怒した。そして、少しして落ち着いたのか、こう言った。
「きょうは寝ましょう。明日、朝一でＮ県に行くから。大輔も多分そこにいるのね？」
「そうだと思う」
「わかった。車の中で詳しい話をしましょう」

　次の日、私たちは、地図を片手にドライブをした。お母さんの運転する車に久々に乗る。大ちゃんの運転に慣れているせいか、とても怖く感じた。
「ヨウは、精神的にすごく不安定になることがあって、嫉妬深くなったり、暴力をふるったりした。でも、優しい時には本当に優しくて、子供思いのいい父親だった。私も愛されているから、きっと、こんなことをされるんだと思っていた。大輔には、離れるべきだって言われたんだけ

どね。結局、さちに一番迷惑をかけちゃったの。子供って、母親の気持ちにすごく敏感で、言葉が出なくなっちゃって。私とヨウは、話し合って、離婚という形を取った。あの頃は、ＤＶなんて言葉もなくて。今思うと、ＤＶ以外のなにものでもないのにね。だから、さちのせいじゃなくて、家族全員が幸せになるために決めたことなの」
　お母さんは運転しながら、静かに話してくれた。
「荻野庸の恋愛小説を書いてたの、大ちゃんだったんだよ」
「はぁ？あの超コテコテのくさい三文小説？」
「ちょっと、そんな言い方しないでよ。私は好きなのに」
「まぁ…親子で、こうも好きな男のタイプが違うとは…、面白いくらいね。ってことは、ほとんど大輔の印税で、養育費払ってもらってたってこと？あー！それも腹立たしい。もう、見つけたら百叩きよ」
　お母さんは怒鳴った。
「大ちゃんと、お母さんの関係、聞いてもいい？」
「前から言っている通り、単なる幼馴染。大輔があまりにもいじめられっ子で見ていられなかったからさ、強くしてやろうと思って、柔道、剣道、空手、プロレス技、全部教えてあげたってわけ。それなのに、あいつときたら、私に苛められたみたいな言い方するんだもん。腹立たしい」
　一体、どんな教え方をしたんだろう。私はとても大ちゃんがかわいそうになった。
「ヨウは、みんなのまとめ役で、本当にいいお兄ちゃんだった。大輔もたくさん助けられていたんじゃないかな。だから、ヨウを助けるなんて、実力に見合わないことしたのよ。作風が全然違うっていうのに」
「お母さん、パパの事件のこと知ってる？」
「知ってるわよ。警察が来たもの。まぁ、別れてかなりたっていたから、ほとんど聞かれることもなかったけど」
　お母さんに、「ガムとって」と言われて、私は銀紙をはがして、お母さんに渡してあげた。
「お母さんも、さちに聞いてもいいかな。大輔のこと」
「うん」
「お母さん、さちと大輔の交際を一応認めているけど、さちはこれからどうするつもりなの？一時的なものだって思って付き合ったの？それとも、結婚とか、先のことも考えて付き合ってるの？」
「そういう話、大ちゃんとしたことないし、わからないよ。でも、大ちゃんのことは本当に好きで」
「世の中、好きってだけじゃどうにもならないこともあるのよ。今すぐ結婚して、子供ができても、子供が二十歳になるって言ったら、大輔はもう六十五歳で、定年過ぎてるのよ。大学とか、一番お金がかかる時なの。男性としても衰える。その十年後には、あんた、下の始末をしてるかもしれないのよ」
「わかってる。でも、それでも、別れられないよ」

「大輔は、あんな性格で、さちの幸せを一番に望むやつだから、だから身を引いたのかもしれない。それを尊重するのも一つの恋愛の形よ。言っておくけど、大輔は本当に昔から意気地無しで、多分プロポーズもしてくれないんだからね。さちが本気なら、さちが腹をくくるしかないのよ」

私は頷いた。

大ちゃんの書いた「少女と幽霊」は、バッドエンドだったけど、私の「少女と幽霊」は、絶対ハッピーエンドにしてみせる。大ちゃんをゴーストライターのままで終わらせない。絶対、幽霊なんかにしない。

私、二十歳。

お母さん、麻美、四十八歳。

Ｎ県に向けて爆走中。私は、大ちゃんに会うために。お母さんは、パパに会うために。

　丘の上を指差し、病院をお母さんに教えた。お母さんは、「あとで、もう一回地図で確認する」と言った。
　何度も来た海の家の駐車場に車を入れ、ひたすら探す。探し物、大ちゃんの車を発見。お母さんにそれを伝え、私たちはそこで別れた。
　私は海の家に向かって走り出した。
　呼吸を整える。
　大ちゃんがいますように。お願いだから、のんきにラーメンや、サザエのツボ焼きを食べていてくれますように。間違っても一人で海に飛び込んでませんように。
　散々祈って、海の家に入ると、店員さんが「いらっしゃいませ」と声をかけてくれた。まばらにお客さんが座っている。大ちゃんを捜す。
　砂浜に一番近い所に腰掛けて、何かを食べていた。
　背中がずいぶんと小さくなった気がした。髪もつやがないように見えた。着ている服も、何だか薄汚れていた。
　私の好きな人は、私よりも先に年をとって、こんな風に汚れていくのかもしれない。手だけじゃなく、顔や、体も、カサカサになって、きっと男性の機能も衰える。
　それでも私は、大ちゃんを選びたい。大ちゃんが死を迎えるその時まで、添い遂げたい。
　近付いて行って、勇気を出して声をかける。
「大ちゃん」
　大ちゃんが、驚いた顔で振り返る。そして、笑って、「死にそこなっちゃったよ」と言った。
　私は、大ちゃんの首にかじりついた。そして、大ちゃんの男くさい体臭を思いっきり吸い込んだ。
　私、遠藤さち、二十歳。
　彼、木崎大輔、四十五歳。
　初恋は叶わないなんていうけれど、私は、一番最初に、一生に一度しか出会えない大切な人にめぐりあえた。
　私は、この人と生きていく。

（本編　了）

## 番外編：空白

　死のうと思って死ねなくて、もう一週間になろうとしている。一度死に損なうと、自分でも情けないくらい食欲がわいてくる。僕は、今日も海の家のラーメンとサザエのツボ焼きで空腹を満たす。この食生活になって、もう五日目だ。毎食なので、さすがの店員さんも、「お客さんとしてはありがたいけど、あんたこんな食生活じゃ体壊すよ」と心配してくれた。
　壊れてしまえばいいのかもしれない。実際、紫外線と潮風と睡眠不足で肌はボロボロだ。ひげも剃りたいけれど、カミソリがない。風呂につかって足を伸ばしたいけれど、家に帰る勇気もない。だから結局この海の家のシャワーを浴びることになる。石鹸もシャンプーもない。シャワーを浴びても、皮脂でベタベタする。こんな不潔極まりない生活が、この僕にもできるなんて思わなかった。
　思い出すのは、年下の彼女のことばかり。もしかしたら、僕を探してくれているかもしれない。それだけが、今生きる望みだ。彼女を捨ててきて、自分勝手だと思う。僕は、こんなに勝手な男だったんだと、死のうとして新たな一面を発見した。
　あの日、最後まで彼女は僕を受け入れてくれなかった。そして僕自身も。心が離れてしまったんだと思った。
　二十五歳の年の差は、埋まらない。彼女の拒絶と、僕の肉体的な衰え。その先に確実に待っている死という別れを考えたら、早いうちに、傷の浅いうちに別れた方がいいと思った。
　結果として、自殺を考えるくらいの傷になってしまったのだけど。
　ラーメンを食べて、砂浜を歩いた。死に場所に、この海水浴場を選んだのは失敗だった。いい思い出の中で死ねたらと思ったけれど、ここにはいい思い出が多すぎる。僕が書いた小説のように、美しく終われない。
　彼女の光るような若い肌や、にぎやかだった海の風景や、きれいな景色や、うまかったラーメンや、それから帰りのドライブで彼女の機嫌が悪くなったことまで。
　照りつける太陽を見た。
　彼女に「大ちゃん」と呼ばれるのが好きだった。キスも、セックスも、彼女の初めてを全部奪った。僕が死んだら、彼女の心にどれくらい深い傷が残るのだろう。それだけはいけないと、そのことが死ぬのをためらう理由になった。
　死にそこなって、彼女に会いたいと思った。めちゃくちゃに抱きつぶしてしまいたいと思った。最後に性欲しか残っていない自分がとても浅はかな人間に思えた。
　「言霊」という言葉がある。願いは思うだけでなく、言葉にした瞬間に効力を持つ。
「会いたい」と口にしてみる。「抱きたい」と口にしてみる。
　でも、わかっていた。神様はそんなに寛容ではない。ここにいたら、何も進展しない。彼女は僕がどこにいるかも知らない。そんな可能性にかけても仕方がない。
「帰るか」と呟いて、僕は砂浜を引き返した。
　海の家に戻る。オーナーに、「帰ることにしました」と話しかけてみる。
「人間、うまくいくときばかりじゃねぇさ」と、フランクフルトをサービスしてくれた。
　ケチャップとマスタードをたっぷりかけて食べる。ビールが飲みたくなって、缶ビールを１本

もらった。
　彼女と付き合うようになって、自分の体臭や口臭が気になって、酒や、匂いの強い食べ物はずっと控えていた。煙草も。胸のポケットでくしゃくしゃになったセブンスターを一本出して吸った。がつんとくる。
　「さっちゃん」と、彼女の名前を呼ぶ。呪文のような言葉。あたたかくなるような、泣きたくなるような。
「大ちゃん」
　振り返る。

　君は、唇をかみしめて、怒りたいのも泣きたいのもこらえて、立っていた。そんな顔だった。

「死にそこなっちゃったよ」
　煙草を揉み消しながら僕は言う。
「あんな、小説のラスト、認めないからね。パパの小説の中で、最悪の出来なんだから。パパの本はみんな好きだけど、あの本だけは嫌だから」
　君は僕にそう言って、首にかじりついてきた。花のようないい香りがする。僕はそれを吸い込む。
「大ちゃん、くさいよ！男くさすぎ！オヤジ臭？」
「あ、ごめん」
　あわてて引き離そうとしたけれど、君は離れてくれなかった。
「さっちゃん、もう一度僕と付き合ってくれないか？一生大切にするから」
　残された僕の勇気を振り絞って、声に出した。
　涙目の君が僕を見た。
「私だけの為に、あの小説書きなおしてくれる？」
　僕は頷いた。
「私だけの為でいいから、筆を折らないでいてくれる？」
　僕が頷くと、君はキスをしてくれた。脳味噌が溶けて流れてしまうのではないかと思えるほどの、とびきり甘いキスだった。僕は、今までにたくさんの女と付き合ってきたけれど、君ほど甘美なキスをする女を知らない。
「ひげ、ジョリジョリを通り越して、気持ち悪い」
　恥ずかしかったのか、事実そうだったのか、君は僕から離れると口をとがらせて、文句を言った。
「さっちゃん、帰ろう」
　君は不機嫌な顔をしたまま、僕に手を差し出した。

　さち、二十歳。
　僕、四十五歳。

次はゴーストでなく、僕自身の作品を書こうと思う。
そして、さちのためだけに、僕とさちの幸せな物語を書こう。

（番外編　空白　了）

## 番外編：公認

　思えば、変だったのよ。大輔ってば、さちの誕生日のたびに、「今年はさっちゃん、何欲しがってるかな」って探りを入れたり、クリスマスにはいつもケーキと本をプレゼントしてくれて。
　確かに、私とヨウ、それから大輔は幼馴染よ。でもね、大輔をお世話したのはほとんどヨウで、私は大輔を鍛えるって名目でしばきまくっていたんだから。いくら、さちが、ヨウの娘だからって、そこまでしてくれるのには何か裏があるんだって考えるべきだったわ。
　あれは、さちが高校一年に上がったばかりの頃だった。急に、携帯の方に電話がかかってきて、「話したいことがあるんだ」って神妙な声で言うから、何なの？って思ったわよ。
　ちょっとした居酒屋で、ちょっといいつまみで、かなりいいお酒をごちそうしてくれたわよね。私の仕事の話と、あんたの仕事の話をして、ヨウの最新刊がいつ出るかの予想をして、だいぶ酔いが回って来た頃に、「実は、さっちゃんのこと、好きになっちゃって」って、弱いのにお酒飲んだからか知らないけど、真っ赤な顔して言った。
「へ？」としか言えなかったわよ。だって、考えてもみて。さちと大輔の年の差は、二十五よ。私と大輔の年の差は、三よ。この男、頭がおかしくなったとしか思えなかった。
「ちょっと、年を考えてよ」って、娘との交際を反対する前に、一般的な話をしちゃったわよ。
　だって、大輔、そこそこもてるのよ。女には不自由しない暮らしをしていたのよ。それなのに、一体何が悲しくてわざわざそんないばらの道を歩く真似をするわけ？年の差だけの問題じゃなく、私の娘よ？二重苦よ。一生、バカにされる人生よ？
「でも、好きになっちゃったんだよ」って、大真面目な顔で言った。その顔がちょっとだけかっこよかったから、思わず、「ふうん。別にいいんじゃない？さちが、いいって言うとも思えないけど」って言ったら、大輔の奴、すごくうれしそうな顔をした。
「ホントか？」
「まぁ。さちがいいって言うんなら」
　大輔は、また日本酒のいいのを頼みながら、「実はさ、事後報告なんだけど、ちょっと前から付き合っているんだ」って言うじゃないの！
「ふざけんな！先にそれを言えっての！人の娘を騙しやがって！」
「騙してないって。なんだよ、その豹変ぶり。だから嫌なんだよ、麻美は」
「このエロオヤジ！まさかもう手を出したんじゃないでしょうね！」
「手もつないでないよ。まだ高校一年だし…」
「当たり前でしょ！いくら性体験の年齢が若年化してるからって、あんたがやったら淫行だからね」
「わかってるよ…」
「節度を持って付き合ってよね。門限は十時。守りなさいよ。手を出したら殺すからね」
「わかってるよ…」
　ホント、「わかってるよ」ばかりで、頼りない返事だったわ。ところで、さちってば、こんなオジサンのどこが良かったのかしら。

　でも、実を言うとね、私もヨウと別れた頃、ちょっとだけ大輔をいいなって思ったことがあるの。いろいろ相談に乗ってもらって、大輔は本当に優しかったから。ああ、こんな人と再婚したら、さちも私も幸せだろうなって、ちょっと思ったこともあったのよ。あー、でも、あの時はすぐにこう思ったんだった。
「大輔とは、セックスは無理。下手そうだし」って。それで断念したのよね。

　私は今、一人で、ビールを飲んでいる。さちはまだ帰ってこない。

　そうそう、この前、大輔とさちと二人で海水浴に行ったのよ。バカ大輔のことだから、どうせ水着姿を見たかったんだと思うんだけど、どうやら図星だったみたいね。
　でも、あの時は参った。さちには、「大ちゃんは、お母さんのことが好きなんだ」って、妙な勘違いはされるし。恋は盲目って言うけれど、さちってば大輔にどんな目で見られているのかもわからないのかしら。
　ちょっと、二人の話を聞いてみたくなって、大輔を呼び出して、さちと二人で話し合わせている所をこっそり聞いたら、これがまた驚いたわよ。付き合って、三年になろうっていうのに、まだきれいな関係だっていうんだもの。そりゃ、私は、節度を守ったお付き合いをしろって言ったわよ。門限も守れって言ったわよ。でもね、日曜とか、一日中遊べる日もあるでしょうに。そういう時に、朝からしっぽりと…って考えなかったのかしら、大輔は。それがまた、「さちを大切に思ってくれているのかな…」なんて、好感触ではあったんだけど。

　時計を見る。九時五十分。大輔君、どうやら今日の門限には間に合わないみたいですね。さぁ、あとでどう料理してやろうかしら。
　そう思っていたら、家の電話がなった。
「もしもし。遠藤ですが」
”あの、僕です。大輔ですけど”
　電話の先の声は、すごく緊張していたわよ。おかしいくらい。震えが伝わるくらい。
「あと十分で門限なんだけど、娘を連れまわして何をなさっているのかしら」
”ごめん。今晩、さっちゃんをうちに泊めてもいいかな。眠ってて、今、起こしたくないんだ”
「はぁん。そうですか。うたたねですか？たたき起したらどうですか？」
”ごめん。今晩だけは、一緒にいたいんだ。これから…その、高校卒業までは、こういうことはないようにするので、今日のことは、あまりさっちゃんにも追及しないでほしい”
　しどろもどろになっている大輔を、からかいたかったけれど、それはできなかった。大輔の相手は、さちなのよ。こんな複雑な気持ちになるなんて思わなかった。
「あんた、さちが嫌がること、しなかったでしょうね！」
”嫌がっては…なかったと思うよ”
　少女から女になったさちに、どんな顔で会えばいいのかしら。それによ！これからどんな顔で、大輔の顔を見ればいいっていうのよ！ああ！やっぱり、反対しておくんだった。

”あの、麻美、聞いてる？”
「はいはい、聞いてますよ」
”ごめん。さっちゃんの初めてをたくさん奪ったよ”
「ふざけんな、ばーか！」
　そう言って私は電話を切った。
　私は、ベッドで穏やかな顔で寝息を立てているさちの顔を想像する。それから、電話を一方的に切られて、困った顔をしながらも、それでも幸せをかみしめているであろう男の姿を想像する。
　さち、あんた、幸せね。年は随分離れているけど、これだけ大切に思ってくれる男なんて、早々巡り合えるもんじゃないよ。
　ねぇ、ヨウ。私たちは、どこかで間違っちゃったけど、でも、さちはとても幸せだから。私たちは別れちゃったけど、さちが幸せなら、それでいいわよね。私たちの弟みたいだった、苛められっ子の大輔が相手っていうのも、何かの縁だと思わない？
　ねぇ、ヨウ、あなた、もう小説は書かないの？偽物じゃない、あなたの書く作品をずっと待っているのよ。
　私は、グラスに残ったビールを一気にあけた。

（番外編　公認　了）

# あとがき

　こんにちは。はじめまして。
　このたびは、「少女と幽霊」を手に取ってくださり、ありがとうございます。
　二十五歳の年の差恋愛なんて、自分の中では絶対にありえん！！と思いつつも、大輔のような優しくて一途な男性ならいいかも…、本好きで、趣味も合いそう…と、思って書きました。
「少女と幽霊」は、最初は、もっとラブコメ風のライトな作品にしようと思っていたのですが、気付いたら「秘密」の多い、シリアスな面も多い作品になってしまいました。
　また、精神医療への思い入れもあります。少しでも、精神疾患や、精神病院に関する悪いイメージがなくなればいいと思って書きましたが、荻野のイメージが強烈過ぎて、逆に変なイメージがついてしまったのではないかと危惧しています。「精神疾患を抱えた人＝犯罪者になる可能性が高い」という図式を撤廃したい思いがあって書いたのですが、いやはや難しいものです。
　さちと別れてからの大輔の心情を書いた「空白」。さちと大輔が公認になったいきさつを、麻美視点で書いた「公認」。どちらも楽しんでもらえればと思います。
それでは、またの機会に、お会いしましょう。

2010年11月30日

澤村多門

## 既刊本

　ブクログのパブーにて、無料電子書籍を既刊しております。こちらも読んでいただけると幸いです。

　僕らの事情～寺島光介の場合～
　ラプンツェル
　僕らの事情～ひなたの場合～